

山と海をつなぐ里づくりの可能性

先日、庄内の三瀬（鶴岡市三瀬）というところへ招かれた。やはり日本海はいい。豊富で新鮮な海産物を堪能してきた。海だけではない。三瀬集落は、三つの河川が合流して、海へと注ぐ。海に面した西方以外の三方はブナやスギの里山に囲まれ、豊富な湧水がある。今も集落には多くの井戸が存在し、住民の暮らしに活用されているということだ。地元には工夫を凝らして生活して来た林業家や農家が多くおられることも今回の訪問で分かった。庄内にはこのような里地里山の特性を備えた海辺の集落が数多く存在している。

今回の訪問は、こうしたすばらしい特徴を持った地域における住民の活動を、どのように起こしていったらよいかという、つるおかユースホステルの菊池良麿さんからの依頼を受けてのものだった。菊池さんはもともと森の専門家。大学で森の生態について学んだ後、大学で知り合った奥さんと一緒にこのユースホステルの運営をされている。ユースホステルは青少年のための旅行の便宜をはかり、また地域の自然や文化を活用した体験活動を推進していくという機能を併せ持っている。菊池さんは「森の人講座」を企画し、三瀬周辺の海辺の自然の豊かさや森林環境の保全の大切さを、青少年たちと活動を行いながら発信してきた。筆者が住む山形県内陸の山村、角川の子ども達も、これまで海辺の環境保全研修ということで年に数回訪れ、菊池さんの指導を仰いできたという経緯がある。

菊池さんの悩みは、自然体験活動や環境保全活動が、関心ある一部の人達の参加にとどまってしまうたりイベント的な一過性のものになってしまったりして、なかなか「地域化」していかないことだった。一方筆者の住む角川の里では、「里の先生」として住民自らが農山村の自然や文化を活かした活動を立案し、日常的に運営する「角川里の自然環境学校」という取り組みがある。菊池さんからの相談とは、どうしたら地域に根ざして、住民が主体的かつ独自に活動が行えるのだろうか、ということだった。

こうした問いへの足がかりは、住民自身が地域を再発見することが大切だということになるかと考える。この海辺の集落には、ちょっと歩いただけで、多くの山村地域を訪れてきた筆者でさえ目新しいものがたくさんある。おそらく、角川の里の子ども達が三瀬を訪れるのを楽しみにするのも自分達の地域にはない良さを体験しているからだろう。そしてそれが逆にまた自分の地域を見直す契機となったりしてもいるわけだ。というわけで、今回のことを契機にして、今後山村と海辺の集落の学習交流を通しながら、お互いの目線の違いを活用した再発見を積み重ね交流を進めながら地域作り活動を行うという方向に話が進むことになった。

かつて山村の角川と海辺の庄内は深い経済的・文化的交流の歴史があった。例えば角川の里からは丈夫な根曲がり杉が切り出され庄内地方に送られ和船の舳先などに利用されたという。田植え時期がずれるため、田植えの恒常的な人材不足を庄内人によってまかなっていたということもある。生態系的な見方からすれば、角川に遡上するサクラマスやサケは日本海のエネルギーを里山に還元する働きを持っているという点で密接な関わりがあると

言えると思う。

山村と海辺の集落を接続していこうとする試みは、新たな地域作りの展望を開いてくれる可能性を有している。新たな産品開発、ツーリズム開発、学習カリキュラム作りなど、ちょっと考えただけでもいくつも具体案が出そうだ。だからこそこの活動には従来のような山村と海辺の当事者の住民だけでは不十分だ。せっかくのネットワーク作りに都市住民、企業、学術研究機関、もちろん行政もかかわっていくことが求められる。こうした新しい要素を受け入れる度量を持てるかどうか、地元民の器量も試されていると言えるだろう。

山と海をつなぐ取り組みは、豊かな環境や文化を再生させ、人々の心の交流の再生にもつながっていくのではないか。とにかく角川の里の子ども達は、今年は海辺の子ども達とも活動も存分にできるということで、今からワクワクしているようだ。農村部の子ども達でさえそうなのだから、都市部の子ども達も一緒に参加できれば、楽しさは倍増するだろう。